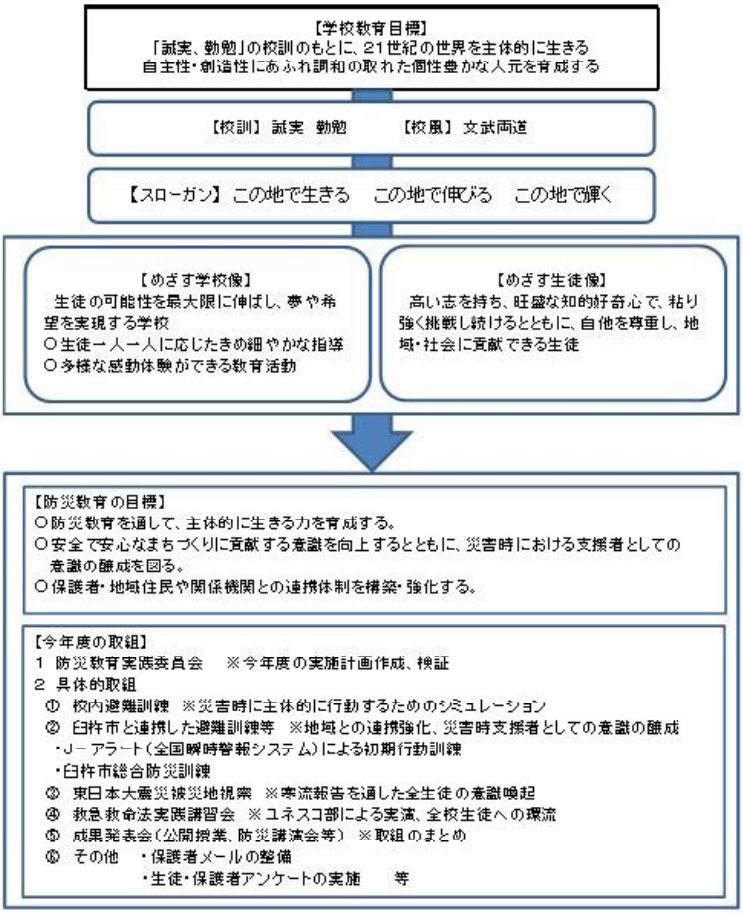
Ⅰ
高等学校
防災教育実践事例

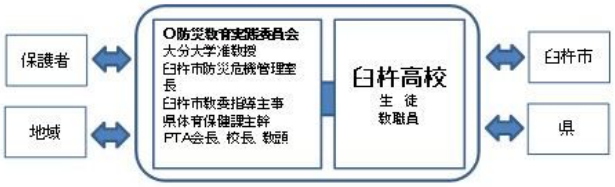
【大分県立臼杵高等学校】

1　取組の概要

（1）取組イメージ



（2）組織図



（3）日程等

実施時期	内容等	実施主体
5月16日	第1回校内防災避難訓練	学校
6月5日	Jーアラート（全国瞬時警報システム）による初期行動訓練実施　　※事前予告なしで実施	臼杵市
7月	救急救命法実践講習会※第7回大分県高等学校青少年赤十字救急法大会優勝のユネスコ部の実演等	学校
7月	第2回校内防災避難訓練　※事前予告なしで実施	学校
7月	東日本大震災被災地視察・ボランティア活動（陸前高田）※教諭2名、生徒2名。防災教育語り部講座等に参加	学校
10月	被災地視察・ボランティア活動体験報告会	学校
10月26日	臼杵市総合防災訓練（津波想定）　※子どもや高齢者等への支援、炊き出しの協力、等	臼杵市
11月	成果発表会（公開授業・防災講演会）	学校
12月	第3回校内防災避難訓練　※消火器訓練	学校
2月	成果発表会参加（東京）	国
2～3月	報告書作成	学校

２　実践経過

月　日	会　場	事業・会議等
6月3日 （火）	本校応接室	◇第1回実践委員会〈参加者：実践委員〉 ・防災教育モデル実践事業の内容について審議する。 ・事業に係る臼杵高等学校の取り組みについて審議する。
7月2日 （水）	臼杵市役所	◇臼杵市総合防災訓練説明会〈参加者：山本教諭〉 ・訓練概要の説明を受ける。
7月15日 （火）	本校 教室・グラウンド	◇第2回防災避難訓練〈参加者：全校生徒・教職員〉 ・地震発生→地震終息→火災発生→避難 ※7月7日（月）～7月18日（金）の間に抜き打ちで実施
	本校応接室	◇第2回実践委員会（参加者：実践委員） ・第2回防災避難訓練について審議する。 ・東日本大震災被災地視察について審議する。
7月26日 （土）～ 7月28日 （月）	宮城県気仙沼市 岩手県 陸前高田市	◇東日本大震災被災地視察・ 〈参加者：山本教諭・加藤教諭・川野奈々・川野七星〉 ・気仙沼市～陸前高田市を視察する。 ・復興語り部ガイドの方に案内していただく。
8月20日 （水）	臼杵市役所	◇第1回臼杵市総合防災訓練説明会〈参加者：山本教諭〉 ・参加予定機関（26機関）による事前打合せ
9月4日 （木）	北海添「憩の家」	◇臼杵市総合防災訓練事前会議（北海添地区） 〈参加者：山本教諭・加藤教諭〉 ・北海添地区自治会・防災士・臼杵造船・臼杵高等学校 ・避難所運営訓練に係る事前打合せ
9月8日 （月）	本校小会議室	◇避難所運営スタッフ説明会（校内）〈参加者：山本教諭・生徒代表8名〉 ・サッカー部・野球部・女子バレーボール部・女子ソフトテニス部各2名ずつに概要を説明する。
9月10日 （水）	臼杵市民会館	◇東日本大震災被災地視察発表 ・発表者…川野奈々・川野七星 ・臼高祭のステージ発表で、全校生徒と教職員にプレゼンテーションを行う。
9月18日 （木）	本校体育館	◇村野淳子氏　講演（60分）〈参加者：1年生・教教職員〉 ・自らの経験に基づいた避難所運営に関する講演を聞く。
10月2日 （木）	本校体育館	◇板井幸則氏　講演（50分）〈参加者：全校生徒・教職員〉 ・自らの釜石での救援活動に基づいた、東日本大震災被災地に関する講演を聞く。
10月14日 （火）	本校会議室他	◇第1回避難所運営スタッフ説明会（臼杵市） 〈参加者：山本教諭・加藤教諭・生徒60名〉 ・総務班、供給班、施設・衛生班、防災班、福祉班に分かれて、市役所職員によるガイダンスを受ける。 ・本番に向けて、班長を中心に具体的な取り組みを話し合う。

10月15日 （水）	臼杵市役所	◇第2回臼杵市総合防災訓練説明会〈参加者：山本教諭〉 ・参加予定機関（27機関）による事前打合せをする。
10月20日 （月）	本校体育館	◇第2回避難所運営スタッフ説明会（臼杵市） 〈参加者：山本教諭・小田教諭・銅城教諭・加藤教諭・藤丸教諭・若林教諭・生徒60名〉 ・それぞれの班が決定した事項について、体育館で一斉にシミュレーションを行う。
10月26日 （日）	本校～わくや 本校体育館	◇臼杵市総合防災訓練（第3回防災避難訓練） 〈参加者：本校1年生・教職員・地域住民・臼杵造船外国人研修生〉 ・臼杵市一斉避難訓練終了後、本校体育館にて避難所運営訓練を実施。 ・運営スタッフ（1年生） 総務班…15名　供給班…10名　施設・衛生班…10名 防災班…10名　福祉班…15名　計60名 ・避難者人数 本校1年生(159名)、北海添地区住民、臼杵造船外国人研修生、海添保育園園児(193名)　計352名
	本校応接室	◇第3回実践委員会〈参加者：実践委員〉 ・臼杵市総合防災訓練、特に避難所運営訓練について審議する。
11月7日 （金）	臼杵市役所	◇臼杵市総合防災訓練検討会〈参加者：山本教諭〉 ・訓練の報告を受け、反省点を確認する。 ・来年度の日程と会場を確認する。
11月29日 ・30日	佐伯市勤労者総合福祉センター	◇防災士資格取得試験 ・受験者…山本教諭・加藤教諭・藤丸教諭（全員合格）
12月17日 （水）	本校 教室・グラウンド	◇第4回防災避難訓練〈参加者：全校生徒・教職員〉 ・12月8日（月）～12月19日（金）の間に抜き打ち実施 ・地震発生→地震終息→授業再開→火災発生→避難
	本校応接室	◇第4回実践委員会〈参加者：実践委員〉 ・第3回防災避難訓練について審議する。 ・公開研究発表会について審議する。
2月2日 （月）	臼杵市 中央公民館	◇平成26年度防災教育モデル実践事業「公開研究発表会」 ・発表者…山本教諭・加藤教諭・川野奈々・川野七星・川辺大樹 平川倫丸・旧杵裕朗・笹田拓海・野中真理萌・山内将志 ・今年度の活動報告をする。 ・「東日本大震災被災地視察」「防災避難訓練」 ・「高等学校生による避難所運営訓練」については、詳細に報告する。 ・小林祐司氏（大分大学准教授）のアドバイスを受ける。 ・板井幸則氏の講演「臼杵市の防災対策の取組」を聞く。
3月14日 ～18日	宮城県仙台市	◇第3回国連防災世界会議（仙台市） 展示品…「高等学校生による避難所運営訓練」の写真15枚

３　防災避難訓練の実施

（１）第1回避難訓練

平成２６年度は右記の日程にて、４回の防災避難訓練を実施した。

１回目の避難訓練は、中間考査の最終日に行った。良い意味でも、悪い意味でも、例年通りの形式での避難訓練であった。文部科学省指定の防災教育モデル実践校として、例年通りの訓練のままで良いのかという議論が始まった。

第1回	5月16日（金）
第2回	7月15日（火）
第3回	10月26日（日）
第4回	12月17日（水）

（２）第２回避難訓練

①　避難訓練の計画

下図は、５月に行った１回目の避難訓練の職員向けの要項の一部である。本校では、生徒に指導する立場から、前もって日時・内容等をきちんときめていなければ準備をするのが難しいため、実施日時に火災が発生する時間まで設定されていた。予見不可能な災害に対する訓練としては、緊張感という点で改善の余地があった。

そこで、指導者の緊張感を高めるためにも、生徒のみならず、大半の教職員にとっても、これまで実施したことのない抜き打ち形式での訓練を企画した。抜き打ちとはいえ、７月７日（月）から７月１５日（金）の２週間の期間を設定した。事前の職員会議で、各教職員に実施する期間、いずれかの授業内に行うこと、訓練する内容は説明したものの、管理職や生徒指導部の一部の教職員を除いて、実施日は知らせなかった。生徒にはクラス担任を通じ、取るべき行動の確認は前もって行った。抜き打ちでの実施であった。

平成26年度　第1回防災避難訓練実施要項（案）

生徒指導部

1 目 的	安全かつ迅速に避難する要領を体得する。	
2 日 時	5月16日（金）中間考査最終日	11:50～12:10
	◎各自で靴を教室に持ち込んでおく	
3 日 程	(1)訓練開始連絡：山本広	11:45（℡62－2303）
	(2)HRでの諸注意	11:50～11:55
	(3)避難行動	11:57～12:05
	(4)校長講評	12:05～12:10

(5)避難行動（晴天時）

11:50　HRでの諸連絡
①避難経路説明
②諸注意　・火災発生の放送を冷静に聞き取る。
・階段に近いクラスから避難する。
・窓を閉めて、カーテンは開ける。
・校舎内は走らない。外に出たらかけ足で集合する。
・不必要な声を発しない。

11:54　第一発見者（廣戸）～生物教室の火災発見、職員室・事務室に連絡

11:55　警報（笠置）

②　避難訓練の結果

７月１５日（火）１４：２０から、第２回避難訓練を実施した。訓練の様子の写真を見ると、きちんと身を守る行動が取れているようにも見えるが、完全に机の下に隠れていない生徒や教職員自身も教卓の中に身を隠す等の行動が取れていなかった。

他にも、初の抜き打ち実施だったせいか、教職員は生徒を机の下に身を隠す行動を取らせずに、地震発生のベルで教室から避難をさせるといった避難誘導のタイミングを間違う、多数の生徒が避難中に私語をするなど、課題の多い訓練であった。

従来の訓練では、災害発生日時が知らされていたので、訓練の前に職員室で教職員同士が要項を読みながら確認する時間があったため、無難に誘導や避難指示を出すことが出来ていた。しかし、今回は抜き打ち形式だったためその確認を行うことができず、実際の災害発生

時には、教職員が正しい行動を取ることができないという問題が浮かび上がった。

訓練後、講評者である臼杵市役所防災危機管理室の板井室長から、「君たち、実際の災害が起きていれば、全員死んでいましたよ。」と非常に厳しいお言葉を頂く結果となった。

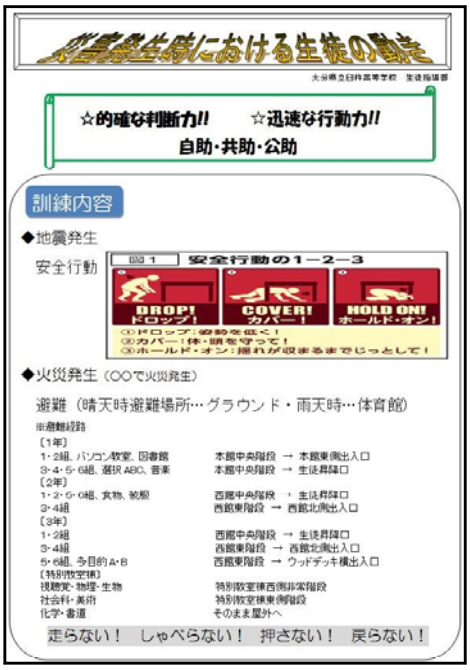
そこで、まず教職員から大いに反省をし、次回に向けて、どうすれば緊張感を持った訓練が実施できるのかを模索した。

③　次回に向けて

そのような中、東日本大震災の被災地視察の引率を通して、宮城県立気仙沼向洋高等学校の存在を知った。東日本大震災では、同校は海に非常に近い学校でありながら、生徒、教職員一人も犠牲者を出さなかったということを聞き、気仙沼向洋高等学校について調べてみた。学校のホームページで震災直後の報告書を閲覧できることが分かり、教職員、生徒に研修資料として使用することの許可を得た。

教職員には避難訓練の実施要項の一部として、この報告書を配布した。実際の状況、差し迫る危機感、先生方の勇気ある行動が伝わってくる報告書であるので、次回の避難訓練では、緊張感を持って臨んでくれることを期待した。

生徒へは、全員分を印刷して避難訓練の２日前に配布した。生徒の感想文からも大変印象深い内容であったことが伝わってきた。また、地震発生直後の行動マニュアル「ドロップ、カバー、ホールドオン」も同時に配布し、生徒の主体的な避難を期待した。



【災害発生時における生徒の動き】

※詳しくは「Ⅲ資料１（１）」を参照

（３）第３回避難訓練

①　臼杵市総合防災訓練

３回目の避難訓練は、臼杵市総合防災訓練に合わせて設定した。

１０月２６日（日）、南海トラフ巨大地震および大津波が発生した想定のもと、防災情報の伝達訓練、住民避難訓練、炊出し訓練、孤立者救出訓練、避難所開設運営訓練等が市内各所で実施された。本校は、全校生徒で避難訓練に、１年生が避難所開設運営訓練に参加した。

午前９時、南海トラフ巨大地震の発生に伴い、大津波警報が発令された。本校の真上をヘリコプターが飛び、防災サイレンが鳴り響いているという状況の中、私語をしながら避難をしていた前回の姿はそこにはなく、生徒も教職員も歯を食いしばって上り坂を登り、高台へ避難していた。率先避難者としていち早く避難するばかりでなく、避難の途中で、リヤカーで避難する保育園児や保育士さんを自発的に助けることができた生徒もいた。

②　訓練の結果

市を挙げての大がかりな訓練であり、緊迫した状況が作られていたことはもちろんであるが、事前に配布した気仙沼向洋高等学校の震災直後の報告書も生徒、教職員に緊張感を持たせることに一役かったと考える。

３回目の避難訓練は２回目の失敗から大きく進歩することができたものの、次回の４回目の本校単独の訓練では、緊張感を持って行うことが出来るだろうかとまだまだ不安はあった。

（４）第４回避難訓練

①　避難訓練に向けての準備

教職員の動きについて、従来の訓練でできたことが抜き打ち訓練でできなかったことから、そこに課題があるのではないかと考えた。

生徒は体育や芸術といった実技教科を除いて、基本的に自分の教室で授業を受けるが、教職員は時間によって、いる場所が違うことが一番大きな違いと分かった。

そこで、「災害発生時における職員の動き」を作成した。

作成時に工夫した点は、ラミネート加工をして年度初めに配布し、年度終わりに回収するようにし、次年度以降も使えるようにした。また、シートの管理をしやすくするため、配布する際にシリアル番号として教職員名簿の番号を一枚ずつ記入したことである。

もう一つの工夫点は、教室の呼び名である。

本校は毎年のようにクラス数が変わるため、教室配置が年度によって異なっていた。このことは、例えば、「〇年〇組の教室から出火」と放送があっても、校舎内のどの位置で出火しているから、どの経路で避難すればよいということを判断しづらくしている原因でもあった。

そこで、「本四５」＝「本（館）四（階）（側を流れる川から見て）５（番目の教室）」というように、年度が変わっても教室名が変わらない呼び方を決め、「職員の動き」の中に入れた。

【災害発生時における職員の動き】

※詳しくは「Ⅲ資料１（２）」を参照

②　訓練の結果

事前にクラス担任へ教卓下のプリント入れ等を撤去しておくことを周知・徹底し、１回目の時に出来なかった教職員の教卓下への初期避難もできた。また、生徒には、机の脚を握ることも徹底させた。「災害発生時における職員の動き」等が功を奏し、４回目の訓練も高い緊張感を持って終わることができた。

その他、本校は電話機からの校内一斉放送ができないため、緊急時には誰でも校内放送を活用できるように、放送室使用マニュアルを作成し、学年ごとに試用した。

【緊急時の放送について】

※詳しくは「Ⅲ資料１（３）」を参照

③　まとめ

回を重ねるごとに生徒の動きが良くなったと褒められ、教師冥利に尽きるが、生徒が変わったのも、教職員の意識が変わったことが一番大きいと考えている。これからも、この意識の高い状態を継続し、当たり前にしていけるようにしていかなければならない。

４　東日本大震災被災地視察報告

平成２６年７月２６日から２８日まで、教職員２名、生徒２名で宮城県気仙沼市から岩手県陸前高田市を訪問した。目的は、実際に現地を歩き、被災された方と語ることで得たものを本校の防災教育に役立てることである。

現地では、復興語り部ガイドの方に案内していただき、震災地のその後を視察した。そこで見聞きしたこと、感じたことを実際に現地に行った生徒２名が自分達の言葉でまとめ、平成２６年９月１０日の臼高祭（文化祭）及び平成２７年２月２日の公開研究発表会で発表した。

以下のプレゼンテーションは、その時のものである。

被災地を訪問して学んだこと

～マイナスをプラスに～

東日本大震災被災地視察

大分県立臼杵高等学校
川野 奈々　川野七星

私たちは、７月２６日～２８日の３日間、東日本大震災の被災地視察に行ってきました。

1

私たちが通っている臼杵高校は海抜０メートルの場所に位置し、今年度、文部科学省の防災教育モデル実践校の指定を受けています。

臼杵市総合防災訓練リーダー会議の様子

2

この写真は、臼杵市総合防災訓練に向けて、会議を行った際の写真です。今回の被災地視察は防災教育の一環として、実際に足を運び、防災に対する意識を高め、教訓から様々なことを学ぶ目的で行ったものです。

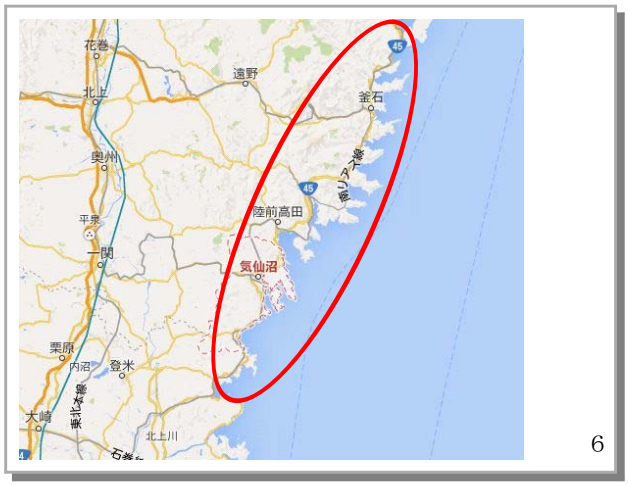
宮城県気仙沼市
～人口～
＜震災前＞ 73000人
＜震災後＞ 67856人
（-5144人）

3

私たちが訪れた気仙沼市は、人口は臼杵市の約２倍の６７，８５６人で被災前は７３，０００人と、今より約５，０００人も多くの人が住んでいました。

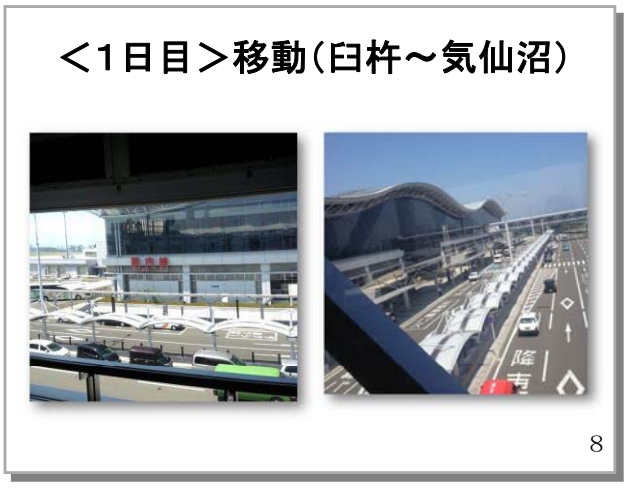
仕事をする８割の人が、水産関係の仕事をしている三陸地方を代表する漁師町です。

臼杵から気仙沼市までの直線距離は、１，１００キロメートル。



その周辺の地形はリアス式海岸で、津波の際には四方八方から何重にも津波が押し寄せてくる地形です。

私たちの住む臼杵、津久見、佐伯も似たような地形をしています。



１日目は臼杵から宮城県気仙沼市まで特急電車や飛行機、新幹線などを利用して移動をしました。

仙台空港では、東日本大震災に関する展示物があったものの、完全に修復されており、被災した空港には見えませんでした。

津波到達高さを表す柱

10

空港の大きな柱には津波の到達した高さを表す印が付けられていました。

表示看板が何メートルを指しているかご覧になれますか？柱には３．０２メートルと書いてあります。

11

実際に柱の前に立った私たちと比べてみると、３．０２メートルがどれくらいの高さなのか想像できると思います。

12

１日目の夜ご飯は復興屋台村に行きました。

気仙沼横丁での出会い

13

ここは津波で自分のお店が流された飲食店の方々が復興を目指し集まっている屋台村です。

そこで偶然、佐伯市出身の方に出会いました。写真のダブルピースをしている人です。この方は臼杵市にある現在の津久見高校海洋科学校の前身の海洋科学高校出身で、復興のために出稼ぎに来ていました。

「足りないのは重機ではなく人、とにかく人手が足りない」

14

視察に行くまでは、２０２０年開催の東京オリンピックに向けて、資材や重機が東北ではなく東京に集まっていると聞いていましたが、その方は「足りないのは重機ではなく人、とにかく人手が足りない」…これが被災地で働く人の声でした。

２日目は、東日本大震災の被災地視察。語り部さんの協力のもとでの被災地視察でした。

今回､語り部さんとして協力してくれたのは、現在３人のお子さんを育てている垣下美紀さん。垣下さんも気仙沼で被災した一人でした。

彼女は、仕事中に被災し、一度自宅に戻り必要なものを持って避難しようとしたのですが、乗ってはいけない車に乗ったため、道路は大渋滞しておりなかなか進めませんでした。ふと横を見ると、海の水は引いた状態で明らかに普段と違った様子に、危機感を感じました。垣下さんは急いで車から降りて山に避難しました。

そして、垣下さんが山に逃げて約５分後に津波が来たそうです。そのあと２日間で７回の津波が押し寄せ、その２日間、水が引かなかったそうです。垣下さんの語る状況は、テレビで語られる以上のものでした。

まず私たちが訪れたのは、気仙沼向洋高校。津久見高校海洋科学校のような水産高校です。

この写真は何だと思いますか？

実は体育館です。屋根の部分が津波で流されています。校舎の窓ガラスは、津波によって壊され、校舎内は、当時のままで、足の踏み場もないほどものが散乱していました。

校舎横に積み上がっているものは、津波によって流されてきたものです。

20

よく見てみると頭から突っ込んでいる車や木などさまざまなものが積み上がっており、津波のエネルギーの強さを物語っています。

21

写真右下の校舎は３階まで窓ガラスが全て壊されています。このことから、この場所の津波の到達した高さは、校舎３回に相当する高さだったことがわかります。

実際に被害を受けた高校を目の当たりして、将来、臼杵にも津波が来た時海抜０メートルにある臼杵高校はどうなってしまうのかと、不安や恐怖を感じました。

杉ノ下地区 ＜気仙沼市＞

22

次に私たちが訪れたのは、杉ノ下地区という住んでいた方の無念さが残る場所です。

東日本大震災の慰霊碑

23

ここは市の避難場所に指定されており、東日本大震災の時にもお年寄り中心にたくさんの人が、避難していました。それにも関わらず、津波が押し寄せ９３名の尊い命が失われてしまいました。ここでは今でも毎月１１日に捜索活動が行われています。

絆

あなたを忘れない
『ここにいれば大丈夫だ』
しかし、無情にも第一波で
下手から家や車が押し寄せ
そして、第二波、第三波が…
九十三名の尊い命と
すべての財産が海へと散った
あの一声が無上の叫びに
私たちはあなたを忘れない
今までありがとう
こころやすらかに

杉ノ下地区民一同

24

助かることができると信じて、波に呑まれていった犠牲者の無念さが伝わる慰霊碑です。

これは高台から見た気仙沼市の風景です。右側の写真を見てみると津波によって建物がなくなっている様子がよくわかります。

語り部の垣下さんによると、防潮堤を作ろうとすると防潮堤に囲まれ、まるで檻の中にいるような気分になるために、防潮堤を作ることを反対する人がいるそうです。

そのために防潮堤はできず、それが決まらないために道路が決まらない、道路が決まらないために家が建てられないため、復興は全く進んでないとおっしゃっていました。

また、道路が決まってない場所があるために震災後どこが通れて、どこが通れないのかがよくわからないと、被災した方にしかわからない悩みも語って下さいました。

次に私たちが訪れたのは、岩手県陸前高田市にある奇跡の一本松です。

陸前高田市は総人口１９，３８２人、被災前は２３，３００人でした。三陸沖に面した岩手県の最も南にある市で宮城県の気仙沼市から車で３０分とそんなに離れてはいませんでした。

29

しかし、被害の状況は気仙沼とは格段の差があり、奇跡の一本松がなぜ「奇跡」と言われているのかという理由がよくわかりました。

私たちが訪れたこの日もたくさんの方々が、奇跡の一本松を見るために来ていました。

震災前 ⇨ 震災後

30

震災前は７万本もの立派な松林でした。右側の写真を見てみるとその差は歴然です。津波の威力がどれほど大きいものかが伺えます。

陸前高田市の地形

31

陸前高田市に大きな被害をもたらした原因は地形にありました。

32

気仙沼市は手前に大島があり、大島がたてとなって津波の威力を弱めることができました。ところが、陸前高田市は写真のように、津波のエネルギーを弱めるものがないだけでなく、さらに入り組んだ地形のために、周辺の波が集まってしまったことで、より甚大な被害に遭いました。

陸前高田市の風景

33

これが陸前高田市の風景です。

住宅も建物もなく、私たちの目に映ったのは、積み上げられた土や作業用のトラックと、かさ上げ用の土を運ぶ巨大なベルトコンベアがあるだけの街。車から降りると息もできないほど砂煙が舞う街でした。この一日で見たもの聞いたことはすべてが心に響きました。

それと同時に私たちが思っていたほど、復興が進んでいない場所が多く、何もない街を目の当たりにした私たちは、言葉を失ってしまいました。

最後に、唐桑半島ビジターセンターに行きました。

ビジターセンターは、今から約５０年前のチリ地震の時の大津波の恐怖を忘れないために、床の振動や風などを再現する、当時の技術で作った日本初の津波体験施設です。

小さな子供にもわかる防災教育を重視した内容であり、私たちが訪れた時、映像には東日本大震災の映像も映し出されていました。

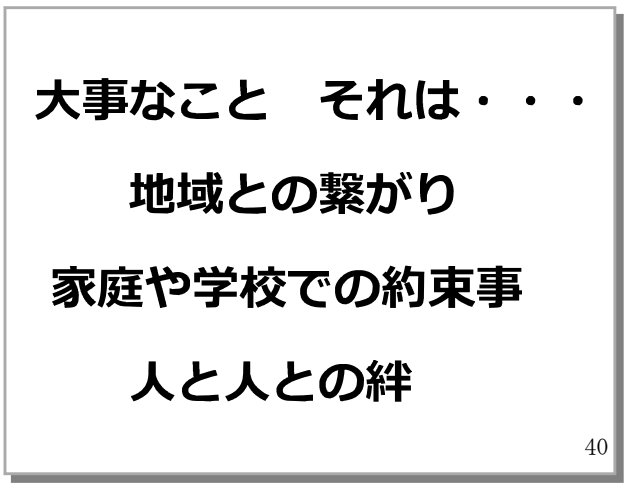
他にも、江戸時代に描かれた被災の絵や津波のメカニズムを学習できる装置もあり、第一波より第二波の方が威力が強いことが分かりました。

チリ地震の時の津波の怖さを忘れないため、また皆に知らせるために３０年以上前に作られたビジターセンターです。

こんな施設が近くにあるのに、人々は怖さを忘れてしまい、東日本大震災でも多くの人が被害に遭っています。大事なことは、人に受け継いでいかなければ忘れてしまい、大きな被害に遭うという繰り返しになるということがよくわかりました。

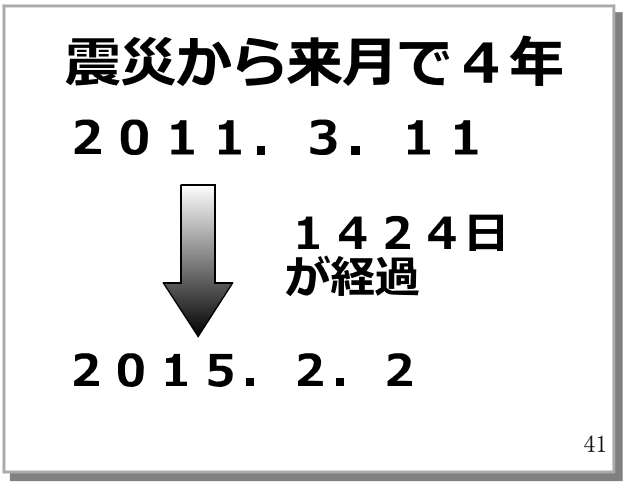
３日目、気仙沼市を後にし、私たちは、臼杵に向けて出発しました。

今回の被災地視察で生の声を聞いたことは私たちにとって貴重な忘れられない経験となりました。



個人個人の防災意識を高めることも必要だが、実際に被災して感じたことは、地域とのつながりや、保護者同士のつながり、ルールをきちんと決めることだと語り部の垣下さんはおっしゃっていました。

ルールというのは、各家庭のルールだけではなく、学校側もルールを決め、きちんと保護者の方に知らせることが大切で、実際に垣下さんもある一定の震度の地震が来た時には、下校させないという紙をもらったそうです。



来月には、震災から４年を迎えようとしています。

42

しかし、場所によっては向洋高校のようにがれきがそのままになっているところや、陸前高田市のように復興が進んでいないところもあります。

津波が残した爪痕を目の当たりにし驚きましたが、それ以上に人々に残る心の爪痕に悲しくなりました。

43

今なお、地震のたびに当時のことを思い出し、津波によって水に対する恐怖心からお風呂に入るのが怖いなど、心に傷を負った人も多いそうです。

また家庭によって被害が違うため、家が被災していないことで、いじめにあった子もいたそうです。それは子供に限った話ではなく、垣下さんの友人も震災の前後で人が変わっていったそうです。

家が壊されていくことよりも

人の心が

壊されていくことの方が辛い

44

家が壊されていくことよりも、人の心が壊されていくことのほうが辛い。

45

４年が経とうとしている今でも、辛い思いをしている人がいることを知りました。

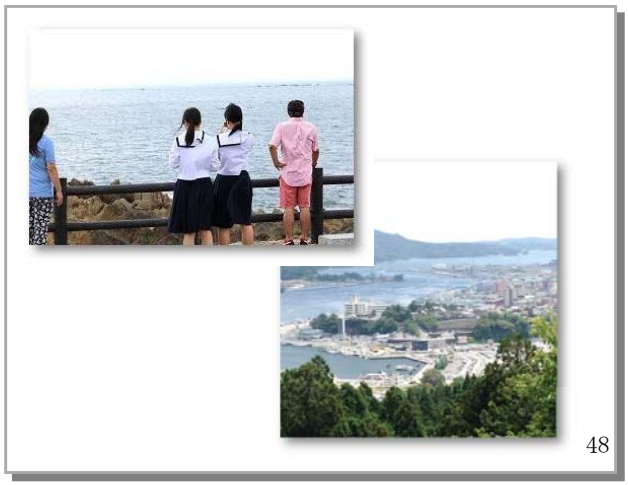
小学校１年生が書いた願い

46

他にも垣下さんの話の中に、小学校１年生の息子のクラスで、七夕イベントの際、それぞれ願い事を短冊に書いたそうです。

みなさんも小学１年生が書く願い事はプロ野球選手や、ケーキ屋さんなどの将来なりたい職業などを思い浮かべると思います。しかし目を引く短冊がひとつありました。なんだと思いますか？

「一生生きる」…この子供は難病を患っているわけではないそうです。東日本大震災があって命の重みを感じたのかこう書いてありました。小さい子供から見た津波は海からやってくるモンスターにみえるそうです。小さい子供にまで強い影響を与えたことがわかります。

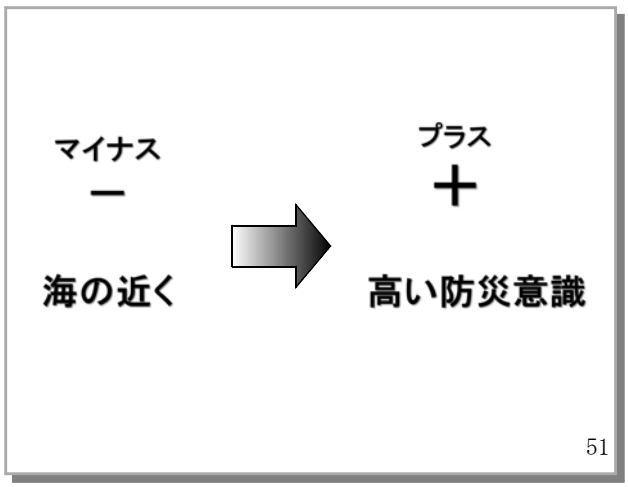


今回、私たちが学んだ教訓を少しでも臼杵高校の生徒をはじめ、いろいろな方々に知ってもらい、災害時に活かしてもらえるようにすることが私たちの役目です。

自分たちがどのようにして、山と海に囲まれた臼杵の地で生きていくかを考えることが一番大切だと感じました。

先程スライドで見せた向洋高校さんの報告書によると、海の近くの学校でありながら、校舎は壊されたものの、生徒、教職員を含めなんと犠牲者は一人も出ませんでした。

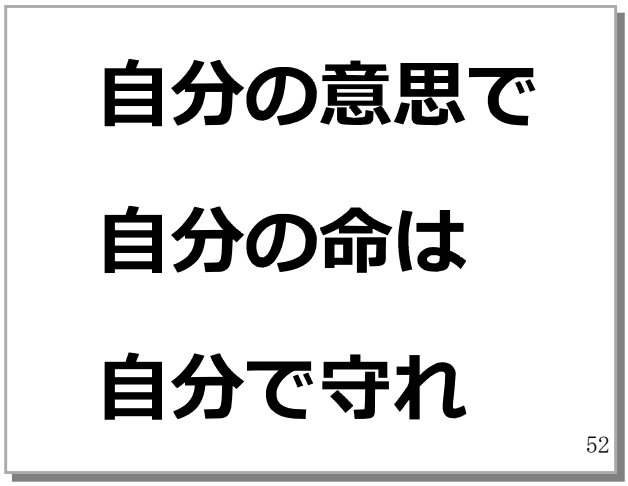
犠牲者が一人も出なかった一番の要因は、意外にも学校が海の近くであったからだそうです。海の近くであったからこそ訓練に真剣に取り組み、防災に対する意識を高くもっていたそうです。



私たちもこれからの訓練を真剣に取り組み防災に対する意識を高めることが重要です。

海の近くというマイナスやハンデを防災を意識する機会が増えるというプラスやチャンスに変える！

このことで命を守ることができると思います。



今回行った視察の中で、語り部の垣下さんがおっしゃった、「自分の意志で自分の命は自分で守れ！」という言葉が一番強く心に響いています。

この言葉を胸に刻んで、これからの日々を過ごしていきたいと思います。

以上で被災地視察の報告を終了したいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

５　避難所運営訓練の実施

本校の実践委員の一人である臼杵市防災危機管理室長の板井幸則氏からの提案で、１０月にある臼杵市総合防災訓練時に高等学校生で避難所運営訓練をやってみないかとの提案があった。高等学校生にどこまでやれるのかという不安はあったが、生徒の力を信じて取り組んでみることとした。

４つの部活動の生徒を中心に避難所運営スタッフを人選し、事前に何度も市職員と打合せを行った。当日は、どのようなハプニングが起ころうとも、大人は一切口出し、手出しをしないことを決め、生徒のみの避難所運営を実施した。（１実践経過参照）

（１）避難所運営マニュアル

当日の避難所運営は、臼杵市が臼杵市民とともに作り上げた「臼杵市避難所開設運営マニュアル」に沿って実施した。

マニュアルの全編は、臼杵市のホームページで見ることができる。

ＵＲＬ　http://www. city. usuki. oita. jp/docs/2014050900034/

3 運営体制づくり

運営体制づくり

応急的な対応が落ち着いてきた段階（目標は24時間～48時間後）で、避難所の運営にあたる「避難所運営協議会」を設置します。避難所における課題への対応や行政の災害対策本部との連携など、自主的で円滑な運営を進めます。

避難所運営協議会の構成

	氏名		氏名
総務班　班長（代表者兼任）		副班長	
供給班　班長		副班長	
救護・衛生班　班長		副班長	
防災班　班長		副班長	
福祉班　班長		副班長	

＊運営協議会に女性も参加するように配慮しましょう。

情報共有のための会議【情報の一元化】

市
班長
班員
避難者

情報集約　情報提供

●班長会議
●会議は定期的に開催します。
●会議のメンバーは、運営協議会の班長・副班長（上記組織図のメンバー）で開催します。

●班別会議（実務者会議）
●班ごとに実務レベルの話合いを適宜行います。
●班別会議の内容は、班長会議での内容や情報等について班員に伝達し、班での課題等は班長会議に報告します。

※一人で悩まず、皆さんで情報を共有し、解決策を見出しましょう。

【臼杵市避難所開設運営マニュアル】

※詳しくは「Ⅲ資料１（４）（抜粋）」を参照

（２）実施要項

臼杵市総合防災訓練における避難所運営について（臼杵高等学校）

１　目的

（１）災害時に近い状況を想定し、安全かつ迅速に避難し、また避難所を運営する上での混乱や様々な課題について学習することで、災害時にとるべき行動について学ぶ。

（２）被災者と同時に支援者にもなり得るという意識を高めるとともに、主体的に考え判断し、行動する力を育成する。

２　期日　　平成２６年１０月２６日（日）　９：３０～１１：３０

３　参加者

臼杵高等学校生徒（１年生　２４０名）及び教職員
臼杵市役所職員
北海添地区防災士
北海添地区住民（１００人）
臼杵造船所の外国人労働者（２０名）
海添保育園の園児及び職員（１００名）

臼杵高等学校生徒の役割
①避難所運営スタッフ（６０名）
※サッカー部、野球部、ソフトテニス部、女子バレーボール部員で編成。
○　下記の５班に分かれて活動する。
総務班　　避難所の各班の活動が円滑に運営できるように統括
供給班　　食料、飲料、救援物資、日用品の調達・配給・提供・管理
施設・衛生班　　避難所の巡回および危険箇所対応や避難所の衛生管理
防災班　　避難所周辺の巡回・報告、ボランティアの受入管理
福祉班　　要援護者の支援・管理、被災者のケア
②避難者（１８０名）※３０名は問題がある避難者の役割を演じる。
○　集団で泣く、携帯ゲーム機をずっと触っている、無関心で下を向いている等

５　日程

９：３０　避難所運営訓練開始
・運営スタッフ以外の生徒は、9:45までに２クラスずつ体育館に入り、避難者となる。
・外部の避難者が避難してくるタイミングは、実際に即し未定とする。
・ライフラインの寸断を想定し、体育館の照明は消灯。
・災害用伝言ダイヤル（体験コーナー）設置。

１０：２０　発電機、照明搬入

１０：３０　ライフライン復旧、避難所物資搬入
・体育館の照明点灯。
・テーマソングをリピート再生し、小音量で閉会式直前まで流す。
・段ボール、間仕切り搬入。

・段ボールを組み合わせ、ベッド、椅子を作成。

１０：４０　救援物資搬入（水１００本、空段ボール箱５０個、段ボールトイレ５個）

１１：００　救援物資搬入（おにぎり５００パック）

１１：０５　物資配給

１１：１０　避難所視察（臼杵市長、市議会議長による避難所激励訪問）

１１：２０　閉会式

次第

・講評　大分県社会福祉協議会大分県市民ボランティア・活動支援センター
　　村野淳子さん

・挨拶　臼杵市長　中野　五郎
　　臼杵市議会議長　大塚　州章

・生徒代表感想発表　防災班班長　川辺　大樹

６　避難所運営の留意点

教職員や市役所職員は、できる限り指示を出さない。避難所では、避難者全員の利益を最優先に考え、主体的に行動する。

生徒以外の避難者として、地域住民、保育園児等が参加するので、積極的に交流を図るより実際に即した避難所運営になるように、避難者役の生徒のうち、３０名が問題行動を演じる。

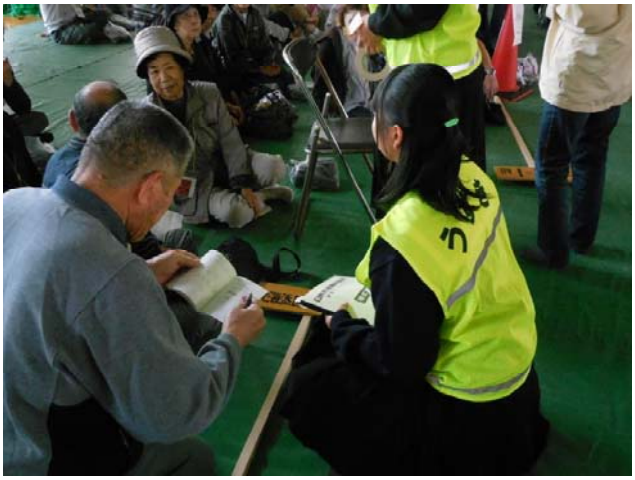
７　テーマソング

ヒカレ（ゆず）

※極度の精神的ストレスを伴う非日常空間において、連帯感を高めるために使用。

（３）当日の様子

写真①
車いすの避難者と、その家族の方に避難所におけるルール等を説明している。



写真②
避難者の方々から様々な質問を受けている。

写真③
地区ごとに、避難者の人数や健康状態等をチェックしている。

写真④
外国人避難者の不安を和らげるために、会話をしている。（臼杵造船所のフィリピン人研修生）

写真⑤
近隣の保育園児を、保育士と一緒に誘導している。

写真⑥
園児の不安を和らげるために、園児と一緒に遊んでいる。

写真⑦
スタッフと代わって、本校生との避難者が園児と遊んでいる。

写真⑧
地域の防災士と協力して、情報収集している。

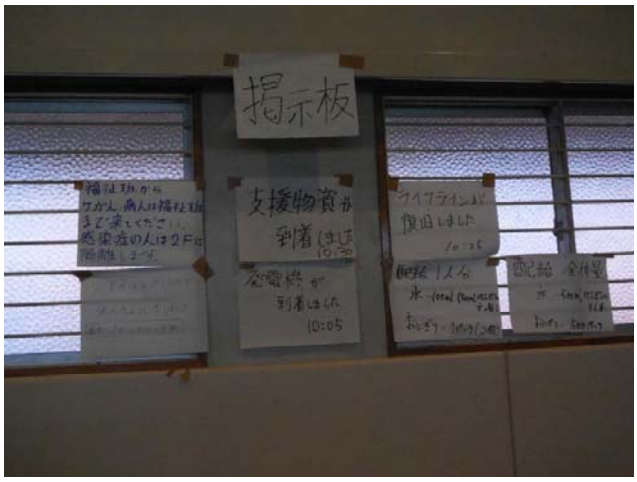
写真⑨
避難者の様々な要求を聞き取りしている。

写真⑩
避難者の要求や質問に対して、回答している。

写真⑪
救援物資の間仕切り板を組み立てている。

写真⑫
救援物資の食料を配布する準備をしている。（全員分無いので、配布する順番を考えている。）

写真⑬
救援物資の食料を配布している。



写真⑭
避難者に確実に情報が伝達できるように、掲示板を随時更新している。

写真⑮
ＮＴＴの協力により、災害伝言ダイヤルを設置している。

（４）避難所運営訓練を振り返って（生徒の反省・感想）

	よかった点・できたこと	悪かった点・できなかったこと
総務班	・避難者へ積極的な声掛けができた ・他の班の仕事の手伝い、フォローができた ・自分の出来ることを探して、臨機応変に対応した ・園児へ優しく対応した ・伝えたい内容を掲示した	・情報伝達が不徹底（掲示板の存在）であった ・避難者との細かなコミュニケーションができなかった ・メガフォンが聞こえづらかった ・道具の準備不足があった ・供給物資が届いた時に連絡しなかった ・各地域への担当者の自己紹介をすればよかった
供給班	・全員が協力した素早く行動した ・自分の係以外の仕事の手伝いができた ・自分たちで決めたことは実践できた	・物資が届くまで暇にしていた ・協力してくれた避難者をうまく利用できなかった ・後のことを考えずに、物資を配布した
施設・衛生班	・最初は固まって動いていたが、時間が経つとそれぞれが考えて行動できた ・レイアウト通りに避難所を開設できた ・声掛け、呼びかけが出来た ・自分の役割を考えて積極的に行動できた ・間仕切り段ボールを組み立てる時、協力できた	・不安を訴える人の人のための相談室が必要だった ・園児の遊び相手の中にスタッフが多かった。高等学校生の避難者に任せてもよかった ・感染者への対応（どこに隔離室を作るか等）はもっと工夫をする必要がある ・どこが何の部屋かを各班長に知らせるできであった ・お知らせの文字をもっと大きく書けばよかった
防災班	・一人ひとりが自分の役割ができていた ・避難者の誘導をうまくできた ・準備がきちんとできていた	・困りがある避難者への対応が足りなかった ・自分の仕事しかしなかった ・総務班との情報の伝達がうまくできなかった
福祉班	・避難者一人ひとりに声を掛けることができた ・助けを求めて来た人への対応も良かった ・協力してベッド作りができた	・負傷者のことを気づけていなかったので、もう少し視野を広くすればよかった ・トイレの場所を知らせる矢印など、目印を作成しておけばよかった ・パトロールは出来たが、担当地区を決めていなかったので、責任者を決めておくべきであった ・外国人への対応をもっと考えておけばよかった ・一般の避難者から医療のできる人をさがすことをしなかった

６　１年間の取組を振り返って

平成２６年度防災教育モデル実践事業のモデル校に指定されて、１年が経過しました。

最初は戸惑うことばかりで、何から始めていいのか全く見当もつきませんでした。思い浮かべるのは、東日本大震災のニュース映像ばかりで、まず考えたことは、被災地の視察に行きたいということでした。今思えば、多くの経験と知識を積むことができて、本校における防災教育の礎ができたと確信しています。その成果と課題について振り返ってみたいと思います。

第１に防災避難訓練の改善です。

今までは、地震や火災の発生時間をあらかじめ決めて、各教室を起点にして、決まった経路で避難していました。しかし、現実は、いつどこで何をしている時に災害が発生するかはわかりません。机上の訓練では命を助けることができないのです。そこで、職員にも生徒にも予告をしない、抜き打ちの避難訓練に取り組みました。今いる場所と、災害発生地によって、当然避難経路は変わります。従って、「災害発生時におけるマニュアル」を職員用と生徒用に分けて、常に携行するようにしました。失敗することを恐れずに取り組むように心がけたのです。臼杵高校の最大の成果は、本気度が増したことです。本気で取り組むことによって、失敗を恐れない強い気持ちと的確に判断する力を身につけることができました。

第２に共助の意識です。

臼杵市総合防災訓練に参加して、避難所運営訓練を経験しました。その時に感じたことは、避難してくる地域住民の多くが、高齢者や幼い子どもたちであったということです。特に昼間は顕著で、本校生徒の力がいかに頼りにされているかということがわかりました。自らの命が助かるだけでなく、この町で貢献できることを確認することができました。被災地視察でも感じたのですが、若者のエネルギーや柔軟な発想が、閉塞感を打ち破るとともに明るい未来を示唆しています。この町で共に生きているということを強く感じることができました。

最後に・・・

わたしたちは気仙沼や陸前高田を歩き、住民の方々と語らい、町のにおいを感じてきました。そこで感じた多くのことを多くの人々に伝えています。義務とか責任とかでなく、自然と伝えなければいけないという気持ちになります。大事なことは、忘れないこと、継続することです。

臼杵高校の防災教育は、今始まったばかりです。向上心を忘れることなく、ひとつひとつ積み重ねていきたいと思います。